

内北東北隅のA地点から一点、隣接する天竜寺との境界付近B地点から二点(2・7)の瓦類がそれぞれ表面採集された。その種別は、丸瓦二点、宇瓦四点、平瓦九点、棟込瓦一点、埴一点、鬼瓦と考えられるもの一点である。

その主なものは、次のとおりである。

丸瓦(第23図1)

筒部か玉縁部かの区別は不明瞭である。径は小さい。凹面に細かい布目痕が残る。側面は篋削りされ、さらに下縁を面取りしている。凸面は篋削りの後、撫で調整を施す。また、部分的に刻目や刷毛目のような痕跡が残る。胎土はやや粗く、焼成も良好とは言えない。色調は凸面が黒色、凹面が灰色を呈する。

宇瓦(第23図2・4)

三点とも瓦当正面に日輪あるいは月輪を表わす円盤を有しており、2と3には雲文が伴っている。さらに2には「寺」の一字が残っており、寺名も施されていたことが分る。頸部は三点とも浅頸である。頸部から凸面の一部までに横方向の撫で、それ以後に縦方向の撫でが施される。凹面は2・3が縦方向の撫でを施し、4は不明瞭である。胎土は砂粒を含み、やや粗い。焼成も良好とは言えない。色調は黒色を呈する。

平瓦(第23図5・6)

二点とも広端面か狭端面であるのか区別ができない。5の凹面は端面寄りに横方向の撫でが施されている。端面および側面も撫で調整されて

おり、端面上部に丸味をもたせ、側面上部縁は面取りされている。凸面にはかすかに糸切り痕が残る。6は凹面に細かい布目痕残り、側面寄りには縦方向の篋削りがなされている。側面も篋削りされ、凹面側縁部は面取りされている。凸面は糸切り後、篋削りがなされている。胎土は粗く、焼成もやや悪い。色調は灰色を呈する。

棟込瓦(第23図7)

瓦当は薄く、単弁八葉の菊花文を内区主文とし、中房は小さく低い。瓦当部と筒部の接合面は凹凸両面ともに補強の粘土を張り、凸面には縦方向の撫でを施している。胎土はやや緻密で、焼成も他に比較して良好。色調は暗灰色を呈する。

埴(第23図8)

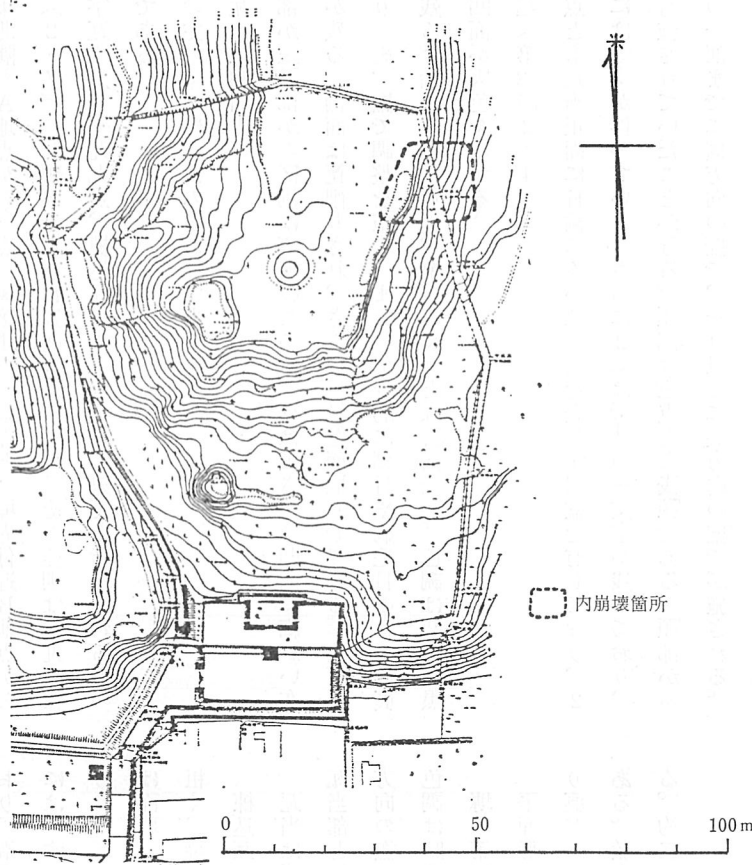
平面形は正方形を呈する。表面には撫で調整が施され、裏面には糸切り痕がかすかに残る。側面は一部に布目痕が残るが、調整痕は不明瞭である。胎土は粗く、砂粒を含む。焼成もやや悪い。色調は暗灰色を呈する。約二三センチ四方、厚さ三センチ。

(小畑 実・佐藤利秀)

佐保山東陵山裾崩壊復旧工事箇所調査

聖武天皇皇后天平心真仁正皇太后の佐保山東陵の東側崖地の一部が、五十七年八月の台風により、地滑りを起した(第24図)。多量の雨水が浸

潤したため、表層が滑落したものであろう。同年十二月二十七日から五十八年一月二十八日まで災害復旧工事を行い、この間、立会調査を実施した。工事は、当該地の境界線外側に石積み擁壁を、中腹に土留木柵を取付け、陵域外の崩落土を埋戻すものである。露出した滑落面および埋



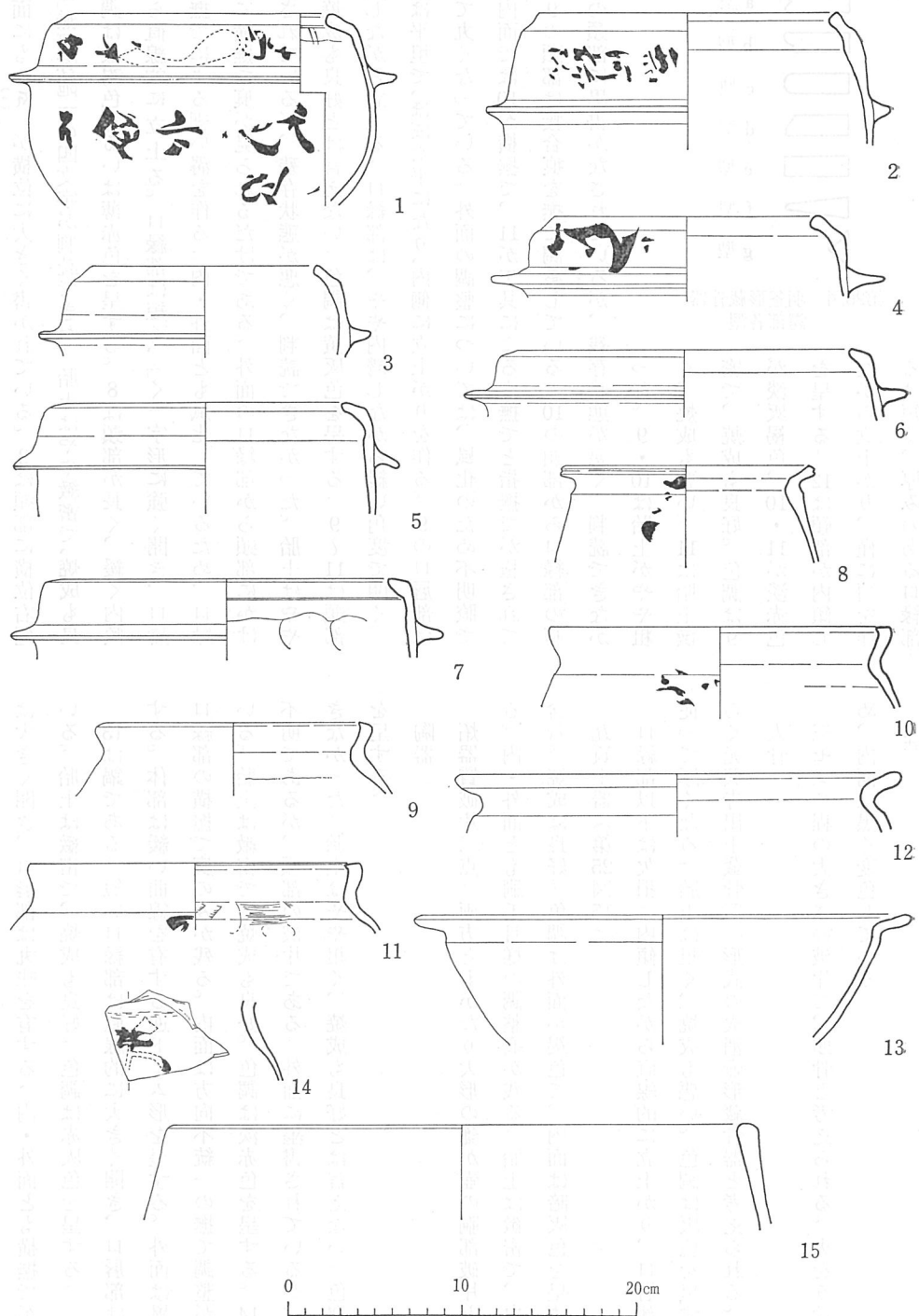
第24図 佐保山東陵崩壊立会調査箇所の位置 (1/1500)

戻した土中に、遺構は認められなかったので、予定通り、施工した。崩落土砂中から、土師器一三〇点・陶器三点・瓦質土器七点・骨片一点計一四一点の出土遺物が採集された。その大部分は小破片であるが、器形の分るものは多くが羽釜形蔵骨器で、墨書銘のあるものや骨片・骨粉の付着したものもある。

次に、主な遺物について述べることにする。

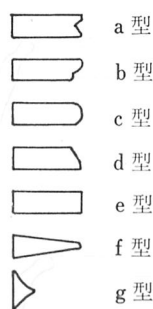
土師器 (図版七 1~4、第25図 1~14)

1~12は、羽釜形蔵骨器である。罎部まで残存する1~7は、頸部が、ほぼ直立するか、やや内傾ぎみに立上る。口縁部は長短の差はあるが、共通して内側斜上方に折曲げている。このため頸部との境に肩を作る。2の肩部は他と比較して張りが弱い。胴部については、1と5のみで、他は欠損しているため全容を知り得ないが、おおむね罎の下で僅かに開き、緩い曲線を描いて底部へ移行するようである。罎の断面形は、元興寺出土蔵骨器の形式分類 (第26図) によると、1がb型、2~7がc型に属する。内・外面の調整は横撫であるいは指撫で施している。1、2、4の外面には墨書がなされている。1は外面全体に墨書されているが、判読できたのは胴部の梵字「𑖀」だけである。頸部・胴部とも字の廻転方向は不明。胴部の字は梵字からみて縦位と考えられる。4の



第25図 佐保山東陵の出土品 (1/4)

頸部外面にも「^ㄣ」が横位に大きく書かれている。2は頸部に横位右廻りで、「無阿弥陀」の四文字が判読できた。胎土はやや緻密で、焼成も良好。色調は淡褐色あるいは薄赤色を呈する。8は頸部が長く、緩く内傾しながら直線的に立上る。口縁部は短く、「く」字形に強く開き、口縁部に指撫による細い溝を作る。内・外面とも風化しているため、口縁部外面に横撫で痕が見られるだけである。外面の口縁部から頸部にかけて墨書されているが、残存状態が悪く、判読できなかった。胎土はやや粗く、焼成も良好とは言えない。色調は黄灰色を呈する。9・11は頸部が内傾しながら立上る。口縁部は、やや内彎しながら緩い角度で開く。口唇部は平坦で、ほぼ水平になり、内側に立上がりを作る。9の口唇部は風化して丸くなっている。外面の調整については、風化のため不明瞭である。内面では10が横撫で、11が工具による横撫でと指撫でが施されている。9の頸部は接合痕を撫で調整している。10の頸部から口縁部の範囲と11の頸部に墨書がなされているが、残存状態が悪く、判読できなかった。9・10は胎土がやや粗く、焼成も悪い。11は胎土緻密で、焼成も良好。色調は9が淡灰褐色、10・11が淡赤色を呈する。12は頸部が内傾しながら立上がり、僅に肩を作る。短く、厚みのある口縁部



第26図 羽釜形藏骨器 罎部各型

は大きく開き、口唇部は丸味を有する。内・外面とも横撫でが施されている。胎土は緻密で、焼成も良好。色調は赤灰色を呈する。13は鍋である。短い口縁部は直線的に大きく開き、口唇部は丸味を有する。体部は緩い曲線を有する逆ドーム形を呈する。外面は風化して、口縁部の横撫で痕のみが残る。内面は方向不統一の撫で調整が施されている。胎土は緻密で、焼成も良好。色調は淡赤色を呈する。14は器形が不明であるが、頸部の破片である。外面に墨書されているが、判読はできなかった。胎土はやや粗く、焼成も良好とは言えない。色調は薄赤色を呈する。

陶器

炆器質破片二点。両方ともかなり大形の甕か壺の胴部破片と考えられる。内・外面とも刷毛目様の調整痕が残る。胎土は緻密で、白色砂粒を含む。焼成は良好。色調は外面が褐色で、内面は暗灰色を呈する。

瓦質土器 (第25図15)

口縁部以下は欠損。内傾しながら直線的に立上がり、口唇部に向うに従って厚くなる。胎土は粗く、焼成も悪い。色調は灰色を呈する。おそらく元興寺出土藏骨器の形式の火消壺形藏骨器と考えられる。

人骨

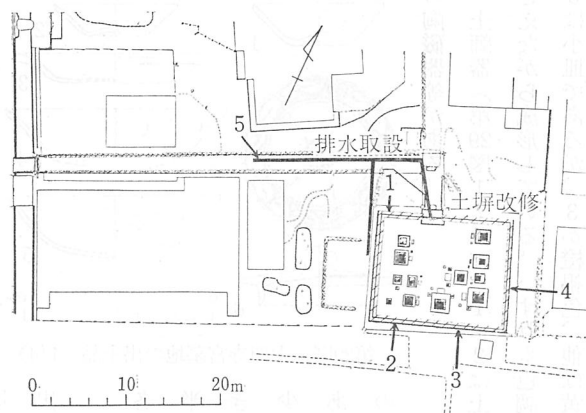
三センチ程の大きさの破片で、頭骨と考えられる。火をうけているため、内面は黒く変色している。

註

(松田和男・佐藤利秀)

昭和五十六年度大聖寺宮墓地土塀改修排水管理設工事箇所の調査

大聖寺宮墓地の土塀をブロック塀に改修し、あわせて排水溝取設工事を実施するに際して、昭和五十六年九月二十三日から十月十四日まで立会調査を行った。掘削溝のうち五箇所については土層の実測図を作成した(第27・28図)。



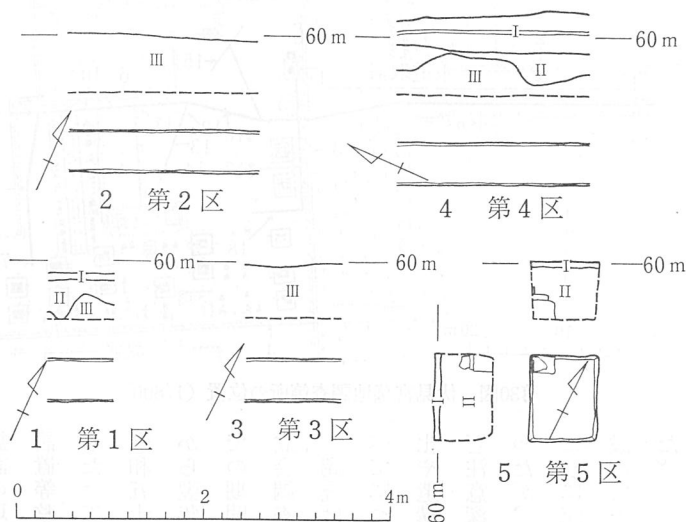
第27図 大聖寺宮墓地調査箇所の位置 (1/800)

掘削はおおむね幅〇・四〇・五メートル、深さ〇・六メートルである

が、第5実測区は排水溝の集水樹にあたるため、幅がやや広い。

標準的な層序は次の通りである。

I層 表土で、黒色ないし黄色を呈し、砂利や礫を含む。

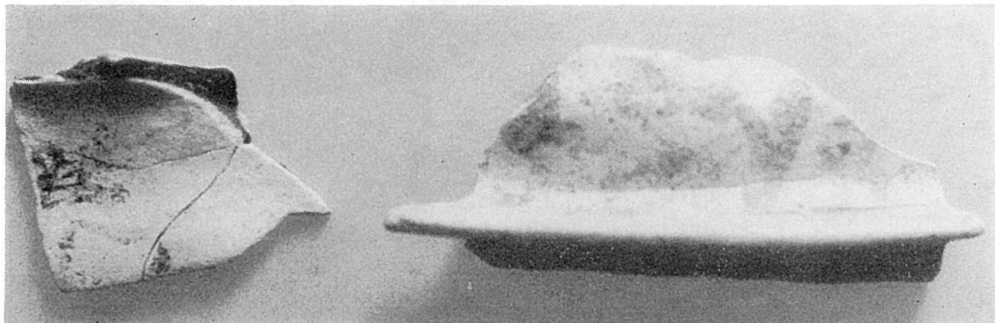
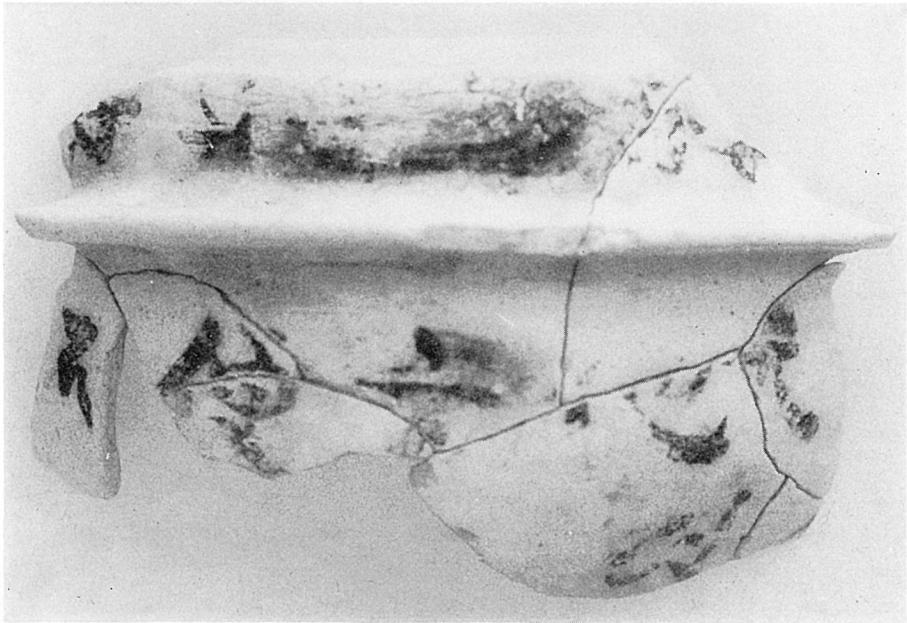


第28図 大聖寺宮墓地実測区平面および断面 (1/80)

II層 礫を含む黒褐色土層で、縮まりは悪い。

III層 茶褐色土層で、II層同様礫を含むが、よく縮まっている。

以上の各層は墓地の整地作業等に伴って形成されたものである。ところで、第5実測区の西北隅角部において、風化礫に取り囲まれた三段積の花崗岩切石が検出された。何らかの遺構の一部と思われるが、これ以上の掘削を控え、切石等をそのまま保存することとした。なお、



佐保山東陵の出土品